News Letter　2013.5.10　第 50 号

たちばな

京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

講演会「介護は何をもたらすのか ー家族・地域・社会で生きる知恵」

介護に関する講演会シリーズ第 3 回「介護は何をもたらすのかー家族・地域・社会で生きる知恵」を開催しました。これは、育児介護支援事業ワーキンググループ推進員の鈴木和代 医学研究科 助教による企画で、誰もが直面する「老い」を安心して迎え、過ごしていくために、立場に関係なく考える場を提供することを目的とし、男女共同参画推進室との共催で事業を行いました。

鈴木推進員の司会進行により、はじめに、稲葉カヨ女性研究者支援センター長より講師の紹介と開会の挨拶がありました。そして、波平恵美子 お茶の水女子大学名誉教授より「介護は何をもたらすのかー家族・地域・社会で生きる知恵」の講演がありました。

はじめに、先生のご専門とされる文化人類学の特徴について、社会学と比較して説明がありました。人類学の手法は、フィールドワークを第一とし、具体的な人間のデータを集めることを重視するものです。波平先生の場合は、大学教員時代また退職後も含めて 30 年以上、一つの同じ地域を訪問して調査研究を続けてこられました。医療人類学の分野で、1960 年代に先生が研究を始められた頃、「国民皆保険制度」が始まりました。その恩恵が全国津々浦々まで広がりました。しかし、先生が調査される地方では、望む医療を受けられるようになるのに 20 年かかったそうです。2000 年に始まった介護保険制度は、12 年経っただけですが、国の方針は確実に個人の生き方を変えていくので、しっかりこの制度を使って育てていく必要があると述べられました。

講演のテーマである「介護は何をもたらすのか」という問いについては、「生き物」として存在するための知恵と、「社会的存在」としての知恵の二つを授けると説明されました。人間の身体的特徴は介護、介助のために発達したかのように作られています。人の身体を支えたり、抱え上げたり、体全体を拭ったりできるのは、人間の特徴です。大型霊長類も子どもを抱きしめる、抱えるなど似た行為はできますが、自分と同じ大きさの他の個体に、人間が行うような行為はできません。人間は集団内での相互扶助と、老いたもの、病むものを排除しない制度を作り、地球上のほぼあらゆる地域で生存することを可能にしました。先生が調査された地域では、村人は「よその家の誰に〇〇してもらった」という詳細な記録をつけていたとのことで、そのお返しの行為は、時には何十年も経ってから行われていたそうです。短期間に完了する相互扶助だけではなく、世代を超えて、長期間の中で行なわれる相互扶助は、人間が生存していくための必然的な行為だったのではないかと説明されました。

また、日本中を調査した結果、「姥捨て山」の言い伝えのある場所で人骨が発見されたことはないそうです。しかも、言い伝えの内容は、正しくは「親を捨てなかった家が、その年寄りの知恵に助けられた」という話で伝承されているそうです。小説や映画のせいで「親を捨てる」という行為が実話のように、海外に伝わったことは問題であると述べられました。

現在は、家族の規模が小さくなり、家庭や親族のネットワーク、また地域社会だけに頼って世代を越えた相互扶助をすることはできなくなりました。介護保険制度が成立する過程での議論は、介護・介助とは何かということを、日本全体が考えるきっかけとなりました。介護保険制度は、家庭内で行なわれている介護という行為であっても、それを日本社会全体で支えるという発想に基づいています。人間は誰にも世話にならずに自分の遺体を処理することはできないのだから、目を反らさず問題に向き合い、より成熟した人間社会を一緒に構築していきましょうと、波平先生は力強く語られました。

講演会に続いて、円座になり、講演者と参加者の交流会「介護を語るカフェ」を開催しました。教職員、学生、またその家族の方々が、さまざまな角度から、介護の体験やこれからの制度のあり方などついて、話題提供・意見交換を行いました。

京都大学優秀女性研究者賞「たちばな賞」表彰式と研究発表

優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰する制度である、京都大学優秀女性研究者賞（たちばな賞）の第５回の表彰式が、３月１日（金）、京都大学医学部芝蘭会館　稲盛ホールにて開催されました。

最初に、林信夫 副学長（男女共同参画担当）より、選考経緯に関する報告を交えた開会の挨拶がありました。本学の理事・教員で構成された 12 名の選考委員による一次審査（書面審査）を経て、二次審査での口頭発表を評価し、受賞者を決定したとのことでした。受賞者の二人には、更なる活躍を期待していると話されました。

そして、松本紘 総長より、学生部門受賞者の飯間麻美 医学研究科博士課程３回生、研究者部門受賞者の今井（佐藤）薫 理学研究科 日本学術振興会特別研究員に、それぞれ表彰状と記念楯が授与されました。続いて、副賞の「ワコール賞」が安原弘展 ワコール株式会社代表取締役社長から贈呈されました。

その後、松本総長から、受賞者への祝福の言葉と更なる活躍を期待するエールが送られました。京都大学は諸外国の大学と比較しても女性研究者が少ない現状を何とか改善したいと考えており、この「たちばな賞」で学生部門、研究者部門ともに、もっと多くの女性研究者を表彰したいと話されました。さらに、優秀な女性研究者を輩出するためには、「たちばな賞」の推薦公募に対して、多くの学内応募が必要であるとも話され、「たちばな賞」を活性化していく方向を示されました。

また、安原代表取締役社長から、受賞者への祝辞が述べられました。ワコール株式会社の研究部門である人間科学研究所では、人間工学、造型などの分野で、大学との連携を模索しておられるとのことです。

引き続いて受賞者による研究発表を行いました。まず、飯間氏より「拡散 MRI を用いた新たな非侵襲的乳癌診断法の開発」の発表がありました。

女性が罹患する癌のトップは乳癌です。社会的に多様な役割を担う 40 ～ 50 代女性の罹患率が高いことが特徴的です。しかし従来の画像診断では、治療法の決定に役立つ情報が十分得られない状況がありました。これを克服する、新たな診断法を開発したいと考えたことが、この研究テーマに取り組むきっかけだったそうです。

乳がん検診の１つ「マンモグラフィー検診」の普及に伴って、小さな病変も見つかるようになりました。これに伴い DCIS（非浸潤性乳管癌）の患者数が急増しています。DCIS の中には、IDC（浸潤性乳管癌）とは異なる比較的悪性度の低いものが含まれており、その点を考慮した適切なマネジメントが必要ではという議論があります。ただし現段階においてはこれらを非侵襲的に診断する事は難しく、新たな診断法の確立が望まれています。

飯間氏は、患者負担の大きい外科的手法や薬剤の投与によらない、拡散強調 MRI による非侵襲的な悪性度の

2013年3月1日（金） 芝蘭会館稲盛ホールにて

評価や、腫瘍灌流の評価をはじめとする新たな診断手法を研究しています。

そして、個々の乳癌の特徴に応じた、適切な治療につながる様な新たな乳癌診断法の確立に向けて検証を行い、臨床応用を目指しているそうです。

次に、今井（佐藤）研究員による「ホヤ胚を用いた遺伝子調節ネットワークの研究」についての発表がありました。

動物の発生では、受精卵から体がつくられていく過程で、様々な遺伝子が働き、個々の遺伝子は調節遺伝子と呼ばれる遺伝子によって制御されます。発生において細胞間の違いを作る要因には、転写因子（遺伝子をON/OFFするスイッチ）とシグナル分子（細胞間の相互作用）があり、これらの組み合わせで細胞が筋肉になったり、神経になったりするのです。

今井氏が研究対象としているホヤは、脊椎動物と共通の体のつくりでありながら、体のつくりが単純、ゲノムが単純なことから、脊椎動物の進化を知るために適しています。

ホヤと脊椎動物の背腹の領域化には、共通のメカニズムが存在しており、脊椎動物では、BMPシグナル分子の濃度で、背側、腹側の区別が発生します。ホヤでも同様にBMPの一種であるADMPが腹側を規定します。これには、Pinheadが深く関わっていて、PinheadタンパクがADMPタンパク質に結合して、ADMPタンパク質の働きを抑制することで、背と腹が決まります。ADMPとPinhead遺伝子はゲノム上で隣接して存在しますが、その両者の間に両方の遺伝子発現に必要な共通のDNA配列（エンハンサー配列）を持っており、それがスイッチのように働くことで、1つの細胞ではどちらか片方の遺伝子だけが発現するようになっています。

脊椎動物であるメダカでも同じようなメカニズムが働いていることがわかっています。ホヤとメダカのように進化的にはなれた生き物で、ゲノム上での遺伝子の並びが保存されていることは稀です。

進化的に遺伝子ネットワークが保存されていたり、ゲノムの上の遺伝子の並びが保存されているのは理由があることから、今井氏は、保存されているところに着目して研究を進めているそうです。

最後に、吉川潔 理事・副学長より閉会の挨拶があり、盛況のうちに閉幕しました。

全学共通科目、ポケットゼミを開講

平成25年度の全学共通科目「性差を科学する1」と、ポケットゼミ「ジェンダーと科学」を開講しました。

第1回ポケットゼミでは、伊藤 公雄（文学研究科）教授の案内で、ゼミ生がセンターの庭、建物を見学した後、「ポケゼミの目的について、ジェンダー研究の歴史と意義」をテーマにゼミが進められました。

女性研究者支援センターの建て替え

女性研究者支援センター建て替え工事のため、5月下旬より「橘会館」（場所：鞠小路通近衛上る）にて業務を実施します。住所、電話番号の変更はありませんが、来室の際はお電話いただき、場所をご確認下さい。

新施設の竣工は、平成26年3月を予定しています。本年度中はご不便おかけしますが、女性研究者支援のリーディング・センターとして発展する今後の活動展開にご期待下さい。

連載：研究者になる！－第 42 回－

旅と子育てとフィールドワーク

アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
平野（野元）美佐

私はなぜか小さい頃から日本を出てみたい気持ちが強く、小学校の文集に将来は旅行家になると書いたほどで、大学生になるとアルバイトをしては海外に行くことを繰り返した。中国シルクロードの旅、シベリア鉄道でのソ連横断、東西ヨーロッパ、イスラエル、エジプトなどいろいろな国に行った。さらには、サハラ以南のアフリカへも足を踏み入れた。しかしそのアフリカの旅が、これまで行った他の地域とは違っていた。百聞は一見に如かずとはいうものの、ただ見てもアフリカのことは全くわからないという気持ちが残った。もちろん、それまでの旅行でもその土地土地を理解できていたとは言い難い。しかし、アフリカは旅行者としての自分がとくになじまない気がしたのである。

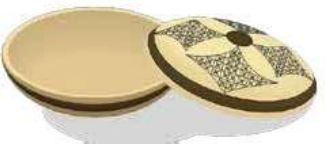
アフリカを理解するには旅行ではなく滞在しなければと思い、アフリカを研究しようと大学院に進んだ私は、最初は社会学、後に文化人類学と専攻を変え、アフリカ中西部の小国カメルーンと関わることになった。奨学金などをいただき、長期では 2 年、短期も合わせると合計 3 年ほどカメルーンに滞在し、フィールドワークを行った。

私はアフリカの都市社会に興味があり、カメルーンの商業民とされるバミレケというエスニック・グループが、いかに都市で暮らしをたてているのかを、彼らと一緒にいろいろな活動に参加させてもらいながら調査をした。とくに、彼らがどのようにカネを稼ぎ、貯蓄し、投資するのか、という貨幣の動きと意味に注目をした。バミレケ実業家の多くはたたき上げで、小規模な商売から出発し、頼母子講で貯蓄しながら商売や不動産に投資し、事業を拡大していく。また彼らに特徴的なのは村とつながり続けることで、都市に暮らしていても故郷に家を建て、同郷会に参加し、故郷の開発に携わっていた。彼らのアフリカ的な都市の生き方から、それまで考えもつかなかった生きる知恵、生き甲斐、創意工夫をたくさん知ることができた。これはまさしく、アフリカに長期滞在したことで可能になったことである。しかし、「アフリカは知れば知るほどわからなくなる」とは恩師の言葉であるが、まだまだわからないことだらけというのが本当である。

博士論文を書いた後、非常勤講師や研究員などを経て、幸運にも常勤の職を得ることができた。大学院から今日まで、それぞれの過程で、良き先生、先輩、仲間に恵まれたおかげだと思っている。

ここ最近は子育てをしており、カメルーンにまでフィールドワークに行くことが難しくなっている。かわりに頼母子講つながりで、沖縄の模合（もあい）と呼ばれる頼母子講について調査している。日本では沖縄だけが、今も広く活発に頼母子講が行われているのである。沖縄でフィールドワークをしていると、「フィールドワークは大変だけどおもしろい！」と改めて思う。文化人類学者や地域研究者は、フィールドワークへ行かなければはじまらないのである。だから子育てをしていると、子育てとフィールドワークをどのように両立させていけるかが難しい課題となる。普段の仕事は保育園の時間になんとかこなせても、フィールドワークはそうはいかない。誰もが長期のフィールドワーク中、子どもをずっとみてくれる家族がいるわけではなく、フィールドに連れて行くこともできないことが多い。これは私だけの問題ではなく、子育てフィールドワーカー（男女問わず）が必ずぶち当たる壁である。自助努力だけでは限界があると思うが、今のところ、個人でやりくりする問題とされている。

しかし一方で、子どもは、子育てをしなければ出会えなかったフィールドや人びととたくさん出会わせてくれた。フィールドワークは、フィールドの人びとの生活に踏み込んで行くと同時に、自分の人生をむこうにさらけ出すことでもある。その関係は一回きりでは終わらず、長期にわたって続くのが文化人類学のフィールドワークである。そういう意味では、子どもをもっていろいろ苦労することは、研究や調査にとってマイナスばかりではないと思うのである。



Center for Women Researchers

〒 606-8303　京都市左京区吉田橘町
電話　075（753）2437
FAX　075（753）2436
E-mail　w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP　http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/